

晩生の早 ユーカラ  
 晩生の中 マツマエ  
 晩生の晩 巴まさり

・は上川農試の分類によるが、中央農試ではともに中生の早に属す。いずれにせよ両品種の差は0～2日である。

## 2. 陸 稻

### (1) 北海早生1号 (北海早生純1号)

来歴 「北海早生1号」は、1953年(昭28)北海道立農業試験場十勝支場で在来の「北海早生」から個体選抜を行い、以後系統選抜を続け1956年(昭31)に「3105」の系統番号で生産力検定予備試験に供試し、1958年(昭33)に「北海早生純1号」の系統名をつけ生産力検定試験および特性検定試験に供試するとともに、十勝管内で現地委託試験にも供試して地方的適否を確かめ、1961年(昭36)に優良品種に決定し、「北海早生1号」と命名された。

- 特性概要 1. 出穂期、成熟期ともに「北海早生」より2～3日早い。  
 2. 草型は「北海早生」に類似するが、稈長および穂長は若干短い。  
 3. いもち病抵抗性は「北海早生」と同程度である。  
 4. 冷水抵抗性は遅延型、障害型ともに「北海早生」に比し強い。  
 5. 収量は平年においては「北海早生」にやや優る程度であるが、冷害年にはかなり優り確収性が高い。  
 6. 玄米の形状および品質は「北海早生」と同程度である。

栽培適地と奨励態度 在来の「北海早生」に比し早熟で耐冷性が強い点以外は、とくに相違はないので、十勝、網走両支庁管内および本道中南部の各地で「北海早生」に換えて奨励する。

試験場名	苗代様式	出穂期 月日	成熟期 月日	生育 日数	成熟期における			10a 当り		玄 米		穂摺 歩合 %	試 験 年 次
					稈長 cm	穂長 cm	1株 穂数 本	玄米重 kg	稈重 kg	1ℓ重 g	1,000 粒重 g		
十勝支場	冷床	8. 15	9. 27	139	64	18. 2	389	181	248	802	20. 3	78. 5	1957～ 1960
上川支場	冷床	8. 3	9. 12	124	76	18. 6	390	221	256	823	19. 9	82. 6	1959～ 1960
北見支場	冷床	8. 23	9. 26	138	56	18. 2	324	113	200	776	20. 4	80. 7	1960

## 3. 大 麦

### (1) ほしまさり (訓系16号)

来歴 「ほしまさり」は、1962年(昭37)北海道立農業試験場北見支場において「春星」を母とし、「女系8号」を父として人工支配を行い、F<sub>1</sub>は温室で養成し、F<sub>2</sub>までは集団養成、F<sub>4</sub>で個

体選抜を行い、F<sub>6</sub>~F<sub>7</sub>は派生系統で比較し、F<sub>8</sub>からは系統の育成を行い固定をはかった。なおF<sub>1</sub>は温室で、F<sub>3</sub>、F<sub>5</sub>、F<sub>7</sub>は鹿児島県で秋播栽培し、世代の促進を図った。1966年(昭41)に「65B-40」の系統番号で生産力検定や予備試験に供し、1967年(昭42)からは「訓系16号」の系統名で生産力検定試験、特性検定試験を行い、同時に現地試験にも供して地方適否を確かめ、1970年(昭45)産の原料で醸造適性を検討した。その結果、1972年(昭47)に優良品種に決定し「ほしまさり」と命名された。

- 特性概要 1. 出穂 成熟期は「春星」より2~3日早く中生種に属する。  
 2. 稈長は「春星」より5~10cm短い、やや長稈種である。  
 3. 穂は二条矢羽根型で、成熟期における下垂度は中程度で「春星」より垂れ難い。粒着密度はやや密で、1穂粒数は「春星」よりやや多い。  
 4. 穂数は「春星」並であるが、稈はやや細く、やや剛い。  
 5. 耐倒伏性は「春星」より明らかに強いもののその強度は十分なものではなく、やや弱の部に属する。  
 6. 子実は大粒で、整粒歩合が5~10%高く、千粒重もやや大きい。  
 7. 収量性は明らかに高い。  
 8. 粒の粗蛋白含量は「春星」に比べ0.5~1.0%低く、麦芽エキスの収量も高く、酵素力も優れ、醸造適性は良好である。

栽培適地と奨励態度 「ほしまさり」は、道内で二条大麦を栽培している全地域に適し、「春星」におきかえられる。

本品種は「春星」に比べると耐倒伏性は強いが、十分なものではなく多肥では倒伏の危険があり、また粗蛋白含量の増加もみられ、品質の低下を招くので、多窒素栽培は避けなければならない。

試験場名		出穂期 月日	成熟期 月日	生育 日数 日	成熟期における			10a 当り		1ℓ重 g	1,000 粒重 g	整粒 歩合 %	試 験 年 次
					稈長 cm	穂長 cm	1穂当 り 粒数 本	子実重 kg	稈重 kg				
北見農試	標準播	7. 2	8. 4	98	100	6. 9	377	31. 4	453	636	45. 4	80. 2	1967~ 1971
	多条播	7. 1	8. 2	96	101	6. 4	559	38. 2	567	636	42. 4	74. 5	1967~ 1971
中央農試		7. 2	8. 2	-	96	6. 6	321	26. 9	-	-	48. 2	67. 5	1968~ 1971
原原種農場		7. 2	8. 1	92	92	7. 2	313	27. 0	244	650	46. 8	-	1969~ 1971

## 4. 裸 麦

### (1) マリモハダカ (北海春裸13号)

来歴 「マリモハダカ」は、1954年(昭29)北海道立農業試験場北見支場(旧大麦育種指定試験地)において「サナダ麦」を母とし、「北統3号」を父として交配を行い、F<sub>2</sub>では穂型、反稈性について集団選抜し、F<sub>3</sub>で個体選抜、それ以降選抜固定を図った。1959年(昭34)に「34N54」の系統番号で生産力検定予備試験に導入、さらに1960年(昭35)には「北海春裸13号」の系統名で生産力検定試験に導入するとともに、各種特性検定試験ならびに地域適応性検定試

験を行った。その結果、1966年（昭41）に優良品種に決定し「マリモハダカ」と命名された。

特性概要 1. 稈長は1m位で、高い方である。

2. 穂型は4角、穂密度は疎、芒は長く多い。籽色、芒色ともに黄色である。

3. 熟期はやや晩生で「北見裸」に比べて4～5日遅い。

4. 耐倒伏性は、「北見裸」「丸実16号」「根室裸」よりきわめて強い。

5. 脱粒は比較的容易で、粒色は飴色、粒型は中、品質は良好で、精麦歩留も「北見裸」「丸実16号」「根室裸」より高い。

6. 耐病性は、小錆病、うどんこ病にやや強く、雲紋病にはきわめて強い。

7. 収量性は栽培条件（多肥栽培、多条播栽培）を変えても「北見裸」より多収で、多条播栽培において最も多収性を示す。

栽培適地と奨励態度 網走支庁、上川支庁の両管内に適し、「北見裸」「丸実16号」におきかえられる。

この品種は晩播で減収するので、できるだけ早くまくこと。また多肥栽培、多条播栽培に適しているので、畦巾30cm以下とし播種量は12kg前後とする。

試験場名		出穂期 月日	成熟期 月日	生育 日数	成熟期における			10a 当り		1t重 g	1,000 粒重 g	試験年次
					稈長 cm	穂長 cm	1 穂 本 数	子実重 kg	稈重 kg			
北見農試	標準播	7. 6	8. 4	98	100	8. 5	229	252	403	708	27. 8	1959～1965
	多肥	7. 5	8. 6	100	102	8. 6	313	264	420	720	27. 9	1961～1965
	多条播	7. 3	8. 4	98	100	6. 9	435	273	484	726	26. 9	〃
上川農試	標準播	7. 4	8. 1	—	101	8. 7	276	251	269	715	29. 8	1963～1965
	多条播	7. 4	7. 31	—	96	7. 0	378	291	323	734	28. 6	〃

## 5. 小麦

〈春播小麦〉

### (1) ハルヒカリ（北見春2号）

来歴 「ハルヒカリ」は、1951年（昭26）北海道立農業試験場北見支場において、「(「Mida」×「Pilot」)を母とし、「春播小麦農林75号」を父として人工交配を行い、以後系統育種法によって選抜固定をはかった。1956年（昭31）「3104」の系統番号で生産力検定予備試験を行い、1957年（昭32）「北育7号」の系統名で生産力検定試験に導入し関係試験機関に配付した。1961年（昭36）より小麦育種指定試験地がこれを引きつぎ「北見春2号」と改名して奨励品種決定現地調査に供試した。1965年（昭40）優良品種に決定し、春播小麦の硬質品種として品質良好なことから農林省に新品种「ハルヒカリ」（硬質春播小麦農林104号）と命名、登録された。

特性概要 1. 出穂期は「農林29号」「農林75号」にくらべて2～4日遅いが、成熟期の差は0～1日である。

2 幼苗期の草状は直立型で葉色は淡緑である。稈長には差異がなく、穂長、穂数は「農林29号」

程度である。穂型錐状で白稈，長多芒を有する。

3. 稈は太くはないが強じんて株は閉じ，なびくことはあっても，完全に倒伏することは少ない。稈の曲げおよび挫折に対しては比較的抵抗性で，ほぼ「キタミハルコムギ」程度の強稈性を示し，「農林29号」，「農林75号」より強い。

4. 赤さび病，黄さび病，黒さび病のいずれにも強く，感染型は抵抗性病斑を示し，従来どの品種よりも強い。赤かび病の発生は「農林75号」程度で他の品種より少ない。うどんこ病には中程度の発生を示すが，年により黒稈病（Black chaff）が発生する。穂発芽性は強いとはいえないが「農林75号」，「農林29号」にくらべれば強い。

5. 子実収量は，一般的には「農林29号」，「農林75号」と大差はないが，多肥栽培で多収を示し，多条播に適する。

6. 子実は赤色・硬質・大粒で重く，千粒重とも重く，硝子率が高い。外見品質は「農林75号」，「農林35号」と同程度か，やや良好で「農林29号」，「キタミハルコムギ」よりも検査等級は上位となる。原粒蛋白は「農林75号」程度で「農林35号」より少ない。多条播やNの施用量の少ない場合にはかなり低くなるので注意を要する。原粒灰分は「農林35号」程度，「農林75号」よりやや多く，マントバ小麦より相当に多い。

7. 灰分移行率高く，製粉歩留，ミリングスコアともに「農林35号」より良く，製粉性はすぐれている。

8. 粉の蛋白，湿麩量は「農林35号」より少なくマントバ小麦程度かやや多い。沈降価は「農林35号」程度で高く，グルテンの質は良好と判断される。粉色は，他の品種より良好であるが，マントバ小麦にくらべると劣る。小麦粉の物理性は「農林35号」，「農林75号」よりすぐれ，アミログラムの粘度も相対的に高い。

9. 製パン適性は，「農林35号」よりやや高く「農林75号」よりはるかによい。

栽培適地と奨励態度 硬質小麦としての性格上，網走，上川両支庁管内に適するが，多肥，多条播に適して良質であるので，全道春播小麦品種のすべて（実質的には「農林29号」）におきかえる。

試験場名	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10 a 当り		1ℓ重	1,000 粒重	試験年次
				稈長	穂長	1000粒当 穂数	子実重	稈重			
北見農試	7. 2	8. 12	106	106	9. 1	306	202	353	760	34. 6	1956～1964
十勝農試	6. 29	8. 7	102	114	8. 6	330	212	295	740	34. 7	1957～1961
上川農試	7. 2	8. 3	95	113	9. 0	331	238	346	776	37. 8	1959～1964

\*畦巾50cm。

## (2) ハルミノリ（北見春17号）

来歴 「ハルミノリ」は，1955年（昭30）北海道立農業試験場北見支場において交配された「硬質小麦農林42号」×「北育1号」の組合せから集団育種法によって育成した。F<sub>2</sub> から F<sub>5</sub> まで集団育種法により集団養成，この間観察によって硬質粒について集団選抜を行った。1961年（昭36）同場内の小麦育種指定試験地がこの材料を引きつぎ，1962年（昭37）F<sub>6</sub> で個体選抜，1963年（昭

38) 純度調査, 1964年(昭39)F<sub>7</sub>派生系統を「北系春145」の系統番号で生産力検定予備試験に編入し, これと併行して系統育成を行った。1966年「北見春17号」の系統名をつけて生産力検定試験, 特性検定試験に編入, 1967年(昭42)より奨励品種決定基本調査および現地調査を行った。1969年(昭44)優良品種に決定し, 同年多収な特性を表わす意味で「ハルミノリ」と命名し, 農林省に新品種(小麦農林111号)として登録された。

特性概要 1. 出穂期は「ハルヒカリ」より1~3日早い, 成熟期は同程度, 登熟日数がやや長い。

2. 幼苗期の草状は直立型, 葉色は「ハルヒカリ」より濃緑。稈長は同程度, 穂長は短い, 穂数は多い。

3. 稈径太く, 穂頸よりの第1, 2, 3節間が短い。このため, なびきにくく稈も強く, 耐倒伏性は従来春播小麦の品種中最も強いが十分ではない。

4. 各種さび病に対しては, 「ハルヒカリ」よりやや弱い。うどんこ病には強く, 年により「ハルヒカリ」に多発する黒稈病(Black chaff)の発生はない。穂発芽性は「ハルヒカリ」程度。

5. 子実収量は, 普通栽培, 多条播, 多肥, 少肥のいずれを問わず多収。「ハルヒカリ」に対し15~20%の増収が期待でき, 年次および場所の安定性が高い。

6. 子実は, 赤粒, 硬質, やや大粒である。ℓ重, 千粒重ともに「ハルヒカリ」なみかやや重く, 硝子率は高い。蛋白含量は多く, 灰分は少ない。

7. 製粉性はほぼ「ハルヒカリ」程度で良好。硬質, 高蛋白のわりにひき易く, 皮ばなれもおおむね良好である。

8. 小麦粉の性状は, グルテン含量多く, 沈降価は低い。ファリノグラム特性は, 「農林75号」程度, 「ハルヒカリ」にくらべ, エキステンソグラムの特性は劣るが, アミログラムの粘度は相対的に高い。

9. パン適性は, おおむね「ハルヒカリ」に近いが酸化剤による改良効果は低い。全体に「農林75号」程度と考えられる。

栽培適地と奨励態度 春播小麦は元来生育期間短く, 管理作業も簡単であるが, この品種は「ハルヒカリ」より耐倒伏性強く, 黒稈病(Black chaff), Yellow berryの出現が少なく, 硝子率も低下しにくいなど作り易い品種である。

網走, 上川両支庁管内およびこれに準ずる地方に適する。秋播小麦が前作物の制約を受けることと, 収穫期のコンバインの効率的利用(秋まき小麦→ビール麦→春播小麦の順に収穫)等を考慮して, 栽培適性のすぐれた本品種の作付をはかること。

試験場名	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10 a 当り		ℓ重	1,000 粒重	試験年次
				稈長	穂長	1㎡当 り穂数	子実重	稈重			
北見農試	7. 2	8. 12	105	116	8.4	327	224	445	765	31.5	1966~1968
上川農試	6.27	7.31	96	107	8.6	318	269	329	758	37.5	1967~1968

\*畦巾50cm。

〈秋播小麦〉

(3) カチミノリ (十系4号)

来歴 「カチミノリ」は、1951年(昭26)北海道立農業試験場北見支場で(「U-13」×「本系323」)×「本系275号」の組合わせで人工交配を行い、1953年(昭28)雑種第3代系統として北海道立農業試験場十勝支場へ分譲を受けたものについて、系統選抜および固定をはかったものである。1957年(昭32)に「3009」の系統番号で生産力検定予備試験を行い、1958年(昭33)以降は「十系4号」の系統名で生産力検定試験に継続供試するとともに、系統育成ならびに地方委託試験に供試した。1962年(昭37)十勝地方に限定して優良品種に決定し、同地方で多収を示すことから「カチミノリ」と命名された。

- 特性概要 1. 出穂期は「ホクエイ」と同じであるが成熟期は1～2日早い。  
 2. 強稈直立で多げつ型である。穂は無芒、褐稃、幼苗の草状はやや匍匐型、葉身は比較的細く、濃緑である。  
 3. 耐寒性は強く冬損および大粒菌核病に対しても「ホクエイ」なみの抵抗性を示す。  
 4. 稈長は「ホクエイ」と同程度で、穂長は同程度かやや短い、稈は強じんではほとんど倒伏しない。  
 5. 黄さび病には強く「ホクエイ」なみであるが赤さび病には「ホクエイ」よりやや弱い。  
 6. 穂数は多く多収性で特に多肥密植栽培で増収性を示す。収量は十勝管内では「ホクエイ」に比べて10%内外多い。  
 7. 子実は赤粒で粒形および品質は中程度、粒質は粉状質である。小麦粉は蛋白がやや少ないが白色を呈しうどん用にむく。

栽培適地と奨励態度 十勝支庁管内9ヵ町村の平均で「ホクエイ」より10%以上多収を示し、とくに管内の肥沃地帯の栽培に適することが明らかとなった。しかし、他の管内における試験では「ホクエイ」を上廻ることができなかつたため、十勝地方に限定して奨励された。

試験場名	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10a 当り		1t 重	1,000 粒 重	試験年次
				稈長	穂長	1000粒 当り	子実重	稈重			
十勝支場	月日 6.14	月日 7.24	日 311	cm 98	cm 8.5	本 421	kg 335	kg 480	kg 698	g 37.6	1957～1960

\*畦幅50cm。

(4) ムカコムギ (北見11号)

来歴 「ムカコムギ」は、1957年(昭32)北海道立農業試験場北見支場において交配された(「Kanred」×「ナンブコムギ」)×「北成9号」の組合わせから、集団育種法により育成し、F<sub>2</sub>からF<sub>4</sub>まで集団養成、F<sub>5</sub>で個体選抜、F<sub>6</sub>で純度調査、以後系統育成を続けた。1963年(昭38)から「北系112」の系統番号で生産力検定予備試験、1964年(昭39)には系統適応性検定試験に編入、1965年(昭40)「北見11号」の系統名をつけて関係試験機関に配付、奨励品種決定基本調査ならびに現地調査に供試した。1968年(昭43)優良品種に決定し、北見国の名峰「武華岳」にちなみ「ムカコムギ」と命名し、農林省に新品種(小麦農林108号)として登録された。

特性概要 1. 出穂期 成熟期とも「ホクエイ」程度かやや早い。

2. 幼苗期の草状は中間型、葉身やや細く、葉色は濃緑、稈長は「ホクエイ」なみ、穂長はやや長目、穂重やや重く、一穂粒数が多い。穂数は少ない。穂型錐状、褐稃で短頂芒を有し、粒着はやや粗である。

3. 株は閉じ直立型、稈は太くはないが比較的強じんて、耐倒伏性は「ホクエイ」なみ。

4. 耐寒性はやや強いが耐雪性ないし各種雪ぐされ病に対しては「ホクエイ」程度。赤さび病はやや少ないが黄さび病、黒さび病、うどんこ病、赤かび病は「ホクエイ」なみ、黒目粒の発生は少ない。

5. 収量は全道的に「ホクエイ」なみかやや多収、多条播に適し、多肥で増収する。

6. 子実の千粒重はやや重い、 $\ell$ 重は「ホクエイ」なみ、硝子率高く「ホクエイ」より変異が小さい。赤粒であるが「ホクエイ」より黄色味が少なく、粒形はやや長い。皮ばなれ良く、製粉歩留が高い。

7. 小麦粉の性状 蛋白含量および湿麩量は「ホクエイ」よりやや多く、粉色は「ホクエイ」程度、沈降価(SV)高く、麩質は「農林8号」に近く良好と判断される。ファリノグラムおよびエキステンソグラムの特性は強力的な性格を示し、パン適性は「ホクエイ」よりはるかに良く、「農林8号」に匹敵する。しかし、アメリカ産のD.H.W.(Dark Hard Winter)にくらべるとかなり見劣りがする。

8. アミログラムの粘度は若干高いが、変質および穂発芽性はおおむね「ホクエイ」程度と考えられる。

栽培適地と奨励態度 十勝、網走両支庁管内においては、標準栽培でも「ホクエイ」を上回る収量を示し、多条播による増収率も高いので、「ホクエイ」を本品種におき換える。また、上川・石狩・空知支庁管内については、収量的に見れば必ずしも適地帯とはいえないが、「ホクエイ」の品質改善を考えて本品種との交替をはかる。胆振支庁伊達地方の「改良伊達早生」は、低収で麩質も良好ではないが、きわめて早熟、短稈の特性をもち、野菜の前作として作られているので、本品種は極早生地帯の奨励品種とはなり得ない。

試験場名	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10 a 当り		1 $\ell$ 重	1,000 粒 重	冬損 歩合	試験年次
				稈長	穂長	1 m <sup>2</sup> 出 り穂数	子実重	稈重				
北見農試	6. 19	8. 6	323	107	9.6	481	411	542	765	38.3	100	1963~1966
十勝農試	6. 15	7. 29	316	96	8.4	363	341	501	764	43.8	—	1964~1966
中央農試	6. 5	7. 24	316	104	9.5	480	375	613	698	39.0	—	1966
原原種農場	6. 11	7. 25	312	91	9.3	218	219	285	751	40.6	27	1965~1966
北海道農試	6. 7	7. 20	308	100	9.9	362	350	446	770	42.5	—	1966

\*畦巾50cm。

## (5) イービス (IBIS)

来歴 「イービス」は1964年(昭39)、ホクレンがオランダの種苗会社 VAN DER HAVE より種子を導入した。VAN DER HAVE の育成経過によれば、1951年(昭26)、次の交配がドイツの

Schega で行われた。

「(Chinese 165 × Panzer III) × Heines IV」 × 「(Tentonen × Hindukush 516) × Heines VII」 × Mcrlin.

F<sub>2</sub>以降オランダの Noord Oost Polder で選抜固定をはかり、1960年(昭35)「H652」の系統番号で公的試験に編入され、1962年(昭37)「IBIS」の品種名で登録されたものである。

北見農試では1964年(昭39)から生産力検定予備試験を行い、1967年(昭42)から生産力検定試験に編入、同時に特性検定試験、栽培法の試験を実施した。1965、1966年(昭40、41)に北海道立中央農業試験場で、1967、1968年(昭42、43)には十勝農業試験場でもそれぞれ生産力検定試験を行い、現地調査も十勝、網走両支庁管内21ヵ所で行った。また、北見農業試験場とホクレンが共同で行った網走支庁管内の現地委託試験は1965、1966年(昭40、41)3ヵ所、1967、1968(昭42、43)は5ヵ所で行った。この結果、晩熟性と耐倒伏性の有利性が認められて、1970年(昭45)優良品種に決定し、原名から「イービス」と命名された。

**特性概要** 1. 出穂期は「ホクエイ」、「ムカコムギ」より7日以上遅く、成熟期も5～9日遅い晩生種である。

2. 幼苗期の草状は匍匐型で、葉は広く、濃緑色である。稈長は「ホクエイ」、「ムカコムギ」より長いが、穂長短く、穂数も少ない。穂型は棒状、白稃、無芒で粒着は密である。

3. 株は閉じ直立型で、稈は太く強剛で耐倒伏性は極強である。

4. 耐寒性、耐雪性とも「ホクエイ」より弱い。赤かび病に対する抵抗性は「ホクエイ」のみであるが回避する傾向もある。黒さび病、黄さび病、赤さび病は「ホクエイ」のみ、うどんこ病はやや少なく、黒目粒の発生はほとんどない。

5. 収量は、全般的には「ホクエイ」、「ムカコムギ」を下回る結果であるが、斜網地帯の一部では、多条播で「ホクエイ」より多収を示す。

6. 子実の千粒重は「ホクエイ」より重い、ℓ重はやや軽い。赤粒で硝子率は「ホクエイ」より低く、粒質は中間質から粉状質に近く、硬質結晶粒子は認められない。粒形は「短」に属す。原粒灰分および蛋白含量は「ホクエイ」よりやや高い。

7. 製粉性 「ホクエイ」、「ムカコムギ」より皮ばなれ良く、ミリングスコアおよび灰分移行率高く、製粉性はすぐれている。

8. 小麦粉の性状 蛋白含量および湿麩量は「ホクエイ」より多いが、沈降価(SV)およびファリノグラムのVVは低い。また、エキステンソグラムの特性は軟質的でややだれぎみの傾向を示す。アミログラムの粘度はやや高い。

**栽培適地と奨励態度** 栽培地域は、網走支庁管内の斜里郡および網走市の南網走と網走郡(美幌、津別を除く)、またはこれに準ずる冬枯れの少ない地帯とする。雨害の危険分散とコンバインおよび乾燥施設の効率的運用をはかるため、現在栽培されている中生種(「ホクエイ」、「ムカ

試験場名	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10a 当り		1ℓ重	1,000 粒重	冬損 歩合	試験年次
				稈長	穂長	1m <sup>2</sup> 当 り穂数	子実重	稈重				
北見農試	月日 6.29	月日 8.10	日 328	cm 107	cm 8.8	本 381	kg 369	kg 654	g 734	g 37.8	% ビ	1964～1968
十勝農試	6.25	7.30	318	101	7.3	296	301	615	685	37.7	ビ～少	1967～1968
中央農試	6.25	8.7	326	95	9.6	152	217	601	582	38.9	やや多～ 甚	1965～1966

\*畦巾50cm。



コムギ)と計画的に配合することとし、根幹品種とはしない。

### (6) ホロシリコムギ (北見23号)

来歴 1962年(昭37)、北海道立農業試験場北見支場小麦育種指定試験地において、「北系8」を母とし、「北海240号」を父として人工交配を行い、系統育種法によって選抜固定をはかった。1966年(昭41)、F<sub>2</sub>で小規模の生産力調査を行い、F<sub>3</sub>で「北系345」として生産力検定予備試験に編入、同時に系統適応性検定試験および特性検定試験に供試した。1969年(昭44)にF<sub>3</sub>で「北見23号」の系統名をつけて生産力検定試験に編入、同時に奨励品種決定基本調査ならびに現地調査に供試した。

1974年(昭49)優良品種に決定し、日高山系的高峰「ホロシリ岳」にちなんで「ホロシリコムギ」と命名し、農林省に新品種(小麦農林114号)として登録された。

- 特性概要 1.出穂期は「ムカコムギ」より1～2日遅いが、莖葉の枯上がりがよく、成熟期は2～3日早い。
- 2.幼苗期の草状は直立型で、葉身広く、葉色は鮮緑色である。「ムカコムギ」にくらべて約10cm短稈で、一穂粒重は重いが穂数は少ない。穂型棒状、白籽、無芒、粒着は密である。
- 3.株は閉じ直立型、稈は太く強剛で、耐倒伏性は「ムカコムギ」、「ホクエイ」よりはるかに強い。
- 4.耐寒性はやや強で、各種雪ぐされ病も「ムカコムギ」、「ホクエイ」程度の発生を示す。赤さび病、黄さび病、黒さび病、うどんこ病、赤かび病の発生も「ムカコムギ」なみであるが、黒目粒は「ムカコムギ」より少ない。
- 5.子実収量は「ムカコムギ」および「ホクエイ」より多収で、多肥栽培での増収率が高い。多肥密植向きで散播に適する。しかし、少肥、瘠地、晩播での比較品種に対する増収率は低い。また総重、稈重ともに多収で、子実重歩合が高い。
- 6.子実は赤粒で、硝子率は「ムカコムギ」より低いが、硬質結晶粒子は「ホクエイ」より多く、粉質は中間質である。千粒重は重いが、 $\ell$ 重はやや軽く、光沢の劣る場合もあって、外見品質は「ムカコムギ」より劣り、「ホクエイ」なみである。
- 7.原粒の灰分はやや高いが、蛋白は「ムカコムギ」なみで、「ホクエイ」より高い。一般に製粉性は「ムカコムギ」より劣り、「ホクエイ」なみであるが、「ムカコムギ」の倒伏頻度の高い多肥栽培では「ムカコムギ」より向上する。

試験場名	出穂期 月日	成熟期 月日	生育 日数 日	成熟期における			10a当り		1 $\ell$ 重 g	1,000 粒重 g	冬損 歩合 %	試験年次
				稈長 cm	穂長 cm	1穂当り 粒数 本	子実重 kg	稈重 kg				
北見農試	6.15	7.26	315	95	8.5	442	50.1	79.9	750	38.8	5	1969～1972
十勝農試	6.14	7.22	310	93	7.6	367	31.1	52.6	741	40.1	1	1970～1972
中央農試	6.12	7.23	310	98	8.3	457	40.6	72.3	745	42.7	—	"
原原種農場	6.12	7.20	312	87	7.8	337	25.5	34.4	762	40.7	91	"
上川農試	6.15	7.22	309	82	8.6	285	26.1	51.2	755	43.4	—	"

\*畦巾30cm。

8.小麦粉の性状 粉の灰分は、ほぼ「ムカコムギ」程度である。粉の蛋白はやや高く、グルテンも多いが、沈降価(SV)は低い。粉の吸水率は「ムカコムギ」、「ホクエイ」より高い。ファリノグラム特性は「ムカコムギ」と「ホクエイ」の間であるが、エキステンソグラム特性は中力的な傾向を示す。アミログラムの最高粘度は顕著に高く、晩刈りによる粘度の低下も少ない。

栽培適地と奨励態度 「ホロシリコムギ」は道南の極早生地帯を除き、ほぼ全道一円に適する。とくに肥沃地の多肥、密播栽培に適するので、主要麦作地帯の道東部および上川管内の基幹品種として奨励する。

### (7) タクネコムギ (北見30号)

来歴 「タクネコムギ」は、1965年(昭40)北海道立北見農業試験場において、「東北118号」を母とし「北系221」を父として人工交配を行い、以後同場で系統育種法によって育成した。1969年(昭44)、「北系494」の系統番号で生産力検定予備試験、特性検定試験に編入、1970年(昭45)「北見30号」の系統名をつけ、生産力検定試験に編入するとともに系統適応性検定試験、奨励品種決定調査に供試、全道各地の適否を検定した。1974年(昭49)本品種の早生、短稈、耐倒伏性などにより優良品種に決定、短稈を意味するアイヌ語をとって「タクネコムギ」と命名し、農林省に新品種(小麦農林115号)として登録された。

特性概要 1.「タクネコムギ」は春先の起生が早く、初期生育は旺盛で、出穂期は「ムカコムギ」より6日、成熟期で7~10日早い早生品種である。伊達市における成績では「改良伊達早生」より、出穂期、成熟期とも1日遅れる。

2.幼苗期の草状は中間型で、葉身は細く、葉色は濃緑色である。稈長は「ムカコムギ」より15cm短い、伊達市での「改良伊達早生」より5cm程度長い。穂長は「改良伊達早生」より長い、「ムカコムギ」より短い。穂数は多目であるが一穂粒数は少ない。穂型錐状、無芒稈、粒着は「ムカコムギ」よりやや密である。

3.成熟期の茎はやや開き、太くはないが、短稈であるため、耐倒伏性は「ムカコムギ」、「ホクエイ」より強い。

4.耐寒性はやや強で、「ムカコムギ」なみであるが、道南の極早生地帯の限定品種「改良伊達早生」より明らかに強い。赤さび病、黒さび病、うどんこ病および赤かび病の発生は、「ムカコムギ」なみであるが、早生のため初発生は早い。黒目粒は刈遅れした場合にやや多い傾向となるが「ホクエイ」より少ない。

5.収量は「改良伊達早生」より多収である。また胆振地方および道央では、標準栽培でも「ムカコムギ」なみの収量であるが、十勝、網走地方の収量は高くない。しかし、北見農業試験場における生産力検定試験の平均収量は10a当り400kgで対「ムカコムギ」比は96%である。また多肥、密植栽培することにより「ムカコムギ」の標準栽培なみの収量は期待できる。

6.子実は赤粒で、硝子率高く、「ムカコムギ」なみの大粒である。千粒重および1重は重く、粒は豊満で外観品質は良好である。

7.原粒および小麦粉の粗蛋白含量は「ムカコムギ」より高いが、灰分も多い。一般に製粉性は「ムカコムギ」よりやや劣るが、「改良伊達早生」よりは高い。粉は「ムカコムギ」より高蛋白でグルテンも多いが、沈降価(SV)は低い。ファリノグラム特性は、吸水率高く、V.Vも「ム

カコムギ」なみで「改良伊達早生」より高いがエキステンソグラム特性は“力”が弱く、粉質は中力的である。アミログラムの最高粘度は顕著に高く、遅刈りした場合の発芽粒割合も少ない。

栽培適地および奨励態度 「改良伊達早生」に代る早生品種として全道一円に栽培可能であるが、とくに収量性からみると、道央以南に適する。十勝、網走支庁管内の主要麦作地帯においては、熟期中の拡大をはかるため、中生品種との配合作付が望まれる。

試験場名	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10 a 当り		1 t 重	1,000 粒 重	冬損 歩合	試験年次
				稈長	穂長	1 り 穂 数	子実重	稈重				
北見農試	6. 8	7. 18	307	89	7. 5	513	44. 9	67. 5	792	38. 8	9	1970～1972
十勝農試	6. 5	7. 13	301	86	7. 0	447	24. 2	54. 3	756	36. 5	1	1971～1972
中央農試	6. 3	7. 14	300	99	7. 6	653	44. 8	75. 8	782	41. 2	—	”
原原種農場	6. 4	7. 15	306	83	7. 5	420	22. 9	41. 4	771	36. 2	11	”
上川農試	6. 8	7. 14	298	80	7. 5	329	27. 1	44. 6	776	41. 5	—	”

\*畦巾30cm。

## 6. えん麦

### (1) オホーツク (北海1号)

来歴 「オホーツク」は、1956年(昭31)北海道農業試験場で「ホナミ」を母とし「前進」を父として人工交配を行い、以後、系統育種法により選抜固定をはかった。1961年(昭36)より育成系統生産力予備試験に編入し、成績良好であったため1962年(昭37)より生産力検定試験を行い、1964年(昭39)より「えん麦北海1号」の系統名をつけ、道内試験機関および現地で地域適応性を検討した。その結果、1966年(昭41)優良品種に決定し、農林省に新品種「オホーツク」(春播えん麦農林3号)と命名、登録された。

特性概要 1. 稈長は「前進」に比べてやや長く、穂長は同等、穂数はやや少ない。

2. 芒はやや長く、稈色は淡黄白色で、「前進」に比べ穂重はやや上回っているが、千粒重は軽く稈率は約3%程度低い。

3. 出穂期は育成地で「前進」より2日、成熟期は3日遅い。

4. 収量は、育成地では「前進」に比べて5%程度下回るが、天北、根釧、北見ではやや上回る。

5. 耐倒伏性はとくにすぐれ、明らかに「前進」「ホナミ」を上回る。

6. 飼料価値は「前進」と同等である。

7. 冠さび病抵抗性はとくに強くない。

栽培適地と奨励態度 「オホーツク」の耐倒伏性は、これまで最も強稈品種とみなされている「黒実1号」を上回る高水準のもので、道内各地の試験結果によると、とくに宗谷、留萌、根釧の各地方で高い適応性を示した。「オホーツク」は倒伏多発のこれら地方に最も好適するものと思われる。さらに、上記以外の倒伏頻発の地域、十勝沿岸、網走北部、上川北部、空知南部の各地方でも栽培の安定向上のため本品種の選択が奨められる。

なお、多収穂を望む場合多条播栽培を行った方がよい。また冠さび病多発地帯は避けた方がよい。

試験場名	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10 a 当り		1 ℓ 重	1,000 粒 重	稈率	試験年次
				稈長	穂長	1 m <sup>2</sup> 当 り穂数	子実重	稈重				
北 農 試	7. 9	8. 14	104	102	24	198	316	340	470	41.7	29.5	1962~1965
天北農試 天垣支場	7. 18	8. 26	120	130	24	181	355	—	441	30.1	—	1964~1965
上川農試	7. 15	8. 16	101	121	23	206	455	—	452	33.6	—	"
根釧農試	8. 7	9. 10	114	114	21	194	216	—	427	33.3	—	"
十勝農試	7. 12	8. 17	115	115	23	174	276	—	456	35.6	—	"
北見農試	7. 20	8. 31	117	123	26	225	332	—	554	35.8	—	"
原原種農場	7. 9	8. 19	112	116	25	217	434	—	451	33.4	27.3	"

## (2) モイワ (北海7号)

来歴 「モイワ」は、1964年(昭36)北海道農業試験場で(「S84」×「Milford」)を母とし、「前進」を父として人工交配を行い、以来、系統育種法により選抜固定をはかった。1966年(昭41)より生産力検定予備試験に編入し、1969年(昭44)より生産力検定試験を行い、1970年(昭45)より、「えん麦北海7号」の系統名をつけて道内各地で試験した結果、1973年(昭48)優良品種に決定し、農林省に新品種「モイワ」(えん麦農林4号)と命名、登録された。

- 特性概要 1. 稈長は「前進」並みで、穂長は3cm短く、主稈小穂数はやや少ないが穂数は多く、かなり多げつ性である。
2. 稈色は淡黄白色、無芒で千粒重は「前進」よりやや軽いが、ℓ重は上回る。稈率は「前進」より7%低く良質である。
3. 出穂期 成熟期は「前進」より2日早く、「オホーツク」に比べると8日早生である。
4. 収量は、「前進」に比較して北海道農業試験場で12%多収で、上川農業試験場が「前進」並であったほかは各試験機関で7~19%の多収を示している。
5. 栽培条件(多肥、少肥、遅まき、多条まき)を変えた場合も、「前進」に比べていずれも上回

試験場名	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10 a 当り		1 ℓ 重	1,000 粒 重	稈率	試験年次
				稈長	穂長	1 m <sup>2</sup> 当 り穂数	子実重	稈重				
北 農 試	7. 9	8. 12	108	117	24	272	445	495	468	36.0	27.0	1969~1972
上川農試	7. 9	8. 7	94	109	23	231	392	(491)	461	31.9	—	1970~1972
十勝農試	7. 4	8. 8	102	114	21	199	288	(406)	485	35.0	—	"
北見農試	7. 6	8. 17	109	107	22	345	353	475	503	32.7	—	"
中央農試	7. 13	8. 15	106	104	23	197	341	462	462	35.7	—	"
原原種農場	7. 8	8. 10	103	107	25	241	376	(498)	484	31.8	—	"

稈重：上川、十勝農試は1970、1972年の2ヵ年；原原種農場は1970、71年の2ヵ年平均。

るが、とくに少肥条件での減収は「前進」より少ない。

6. 耐倒伏性は「オホーツク」に比べると、いくぶん劣るが、「前進」に比べて明らかにまさる。

7. 冠さび病に対する罹病程度は「前進」並みで、とくに強くない。

栽培適地と奨励態度 道内各地の試験結果、多くの場所で「前進」を上回る多収性を示し、しかも「前進」に比べて、熟期が早い、穂数が多く倒伏しにくい、浮率が低く外観品質も良好であるなどのすぐれた点が認められるので、全道で「前進」におきかえて栽培する。ただ冠さび病には強くないので、さび病の多発地方では避けた方がよい。

耐倒伏性は「前進」を上回ってはいるが、倒伏防止のため施肥量の増加は避けた方がよい。

## 7. とうもろこし

〈飼料用〉

### (1) ジャイアンツ (本交3304)

来歴 「ジャイアンツ」は、1951年(昭26)に米国より導入した細胞質雄性不稔系統「WF9<sup>-T</sup>」を利用した単交配と、1955年(昭30)に青森県立農業試験場より分譲を受けた青森県在来の「エローデント」との間の一代雑種である。

1956年(昭31)に(単交配×品種)の組合せが行われ、1957年(昭32)より生産力検定試験を開始し、1959年(昭34)以降、系統適応性検定試験および各場の原種決定試験に、1960年(昭35)以降は原種決定現地試験に供試した。1962年(昭37)優良品種に決定し、「ジャイアンツ」と命名された。

組合せ内容および構成する自殖系統の来歴は次のとおりである。

(「WF9<sup>-T</sup>」×「W22」)MS×「青森在来エローデント」「WF9<sup>-T</sup>」：ウイソコンシン農試においてTexas型細胞質雄性不稔個体と「Indiana WF9」の戻し交配により育成。

「W22」：ウイソコンシン農試において、「2nd Cycle Ill. B 10」×「W25」より育成。

特性概要 1. 熟期は「青森エローデント」より、約5日早く、「複交3号」より約5日おそい。

2. 総生草量は、府県産「エローデント」に比して5～10%低く、「複交3号」よりは50～80%多収である。

3. 子実量は、「府県産エローデント」に比して20～50%増収し、「複交3号」よりはやや劣る。年次による生産量の変動は少なく安定している。

4. 雌穂は円筒型で太く長い。粒列は12～22行、1列粒数は約40粒である。粒は黄色のデント種で、「エローデント」に比しやや小さい。

5. 草丈、着穂高ともに「エローデント」より低く、倒伏には強い。

6. 栄養収量の試算値によると、飼料単位、可消化蛋白質ともに「エローデント」に比して約20%増収し、年次間の変動も少ない。ただし、道東、道北地域では熟度の関係でむしろ「複交3号」「複交8号」などに劣る場合もある。

7. 細胞質雄性不稔系統、およびその回復因子を利用しているので採種の場合に除雄操作を必要としないため種子価格の低減をはかることができる。